

ハッ場ダム住民訴訟通信-84

2013年2月1日発行

カスリーン台風の最大流量は 15000 m³/秒だった。

ハッ場ダム建設の根拠に壊滅的打撃。建設院(旧建設省の前身)資料発覚。

いま、国土交通省はカスリーン台風の実績最大流量を 17000 m³/秒として、ハッ場ダムの必要性を流布しています。この 17000 m³/秒、これまでも大熊孝新潟大名誉教授、嶋津暉之さん、関良基拓大准教授などにより非科学性、捏造を指摘され、現在中断中の利根川江戸川有識者会議でも最大の争点となっていました。しかし遂にとどめの一撃となる内部資料が発覚、ハッ場ダム建設の根拠は壊滅しました。**※以下 m³/秒はトンと表記します。**

約 40 年前、岡本芳美元新潟大教授(河川工学)は、建設省OBから「利根川改修計画資料」を寄託されました。資料は、カスリーン台風の水害を受けその対策を決めた「建設省治水調査会利根川委員会」の議事録。この議事録こそ真実の動かぬ証拠となったのです。

カスリーン台風の折、利根川の流量観測点「八斗島」は流量計が流され計測不能に陥りました。そこで上流にある若泉(神流川)、岩鼻(烏川)、上福島(利根川)の 3 地点の流量を単純に合算した 15000 トンを最大流量として採用、それをもって委員会は審議を進めていました。

第 6 回目の審議にあたる 1948 年 3 月 3 日、国は突然「最大流量は 17000 トンである」と提示しました。理由は「上福島の係数が間違っていたから」というもの。当時の委員長、金森誠之工学博士は「それではその流量が八斗島から 50km 下流の栗橋(破堤地点)までどこを流れたか説明がつかない」と問いかけます。

※ここが重要ポイント：カスリーン台風時、八斗島と栗橋の中間点である川俣の流量は 13500 トンを記録していました。その後の洪水はすべて川俣の流量は八斗島を上回っています。つまり川俣が 13500 トンなら八斗島はそれより少なくなければ辻褄が合わないのです。

※もうひとつポイント：そもそも八斗島上流 3 地点の流量の和=15000 トンには合流点でおこる流れの渋滞「河道貯留」が考慮されていません。河川工学の常識では 10~20%減少するとされています。当時も 12000~13000 トンが妥当とする意見がありました。

結局、委員会は 17000 トンには疑問がある、だから 16000 トンも併記すると妥協。その後建設省は 17000 トンのみを実績流量として今日に至っています。

そして今、国土交通省は 17000 トンを基にカスリーン台風並みの大雨が降った場合、八斗島には 21100 トンの水が流れると想定しハッ場ダム計画を進めています。実績とする 17000 トンとの差は上流部での氾濫としていますが、真実が 15000 トンなら 17000 トンはおろか、想定数値の 21100 トンも、それを基にした基本高水 22000 トンも瓦解します。

岡本氏は語ります「カスリーン台風で発生した最大流量は本来、下流の堤防強化などで対応できるものだった。結果的に利水での貢献もあったとはいえ、ハッ場ダムをはじめとするダム建設計画を実現するため、治水の必要性をひねり出したのが真実だろう」

※利水の貢献とは既設の矢木沢ダムなどを指します。

岡本氏は、上記の資料を踏まえた独自の流出計算法で、八斗島の最大流量は 12000 トンとする論文を近く発表する予定です。

まだある。ハッ場ダムの根拠消滅の証。

80年間の調査で森林の保水力証明。東大生態水文学研究所

これまで国土交通省は、森林の保水力は認めるが、治水計画の対象になるような大雨の場合、飽和雨量をこえるとすべてが流出するとしてきました。

例えば、飽和雨量 100mm、一次流出率 50%の地域に雨が降った場合、地中に 100mm 浸透するまでは降った雨の 50%が流出し、100mm に達した後は 100%流出するというものです。この計算基準に他の係数を加えて算出されたのが、カスリーン台風の想定洪水流量 21100 トン、利根川の基本高水 22000 トンになり、ハッ場ダム建設の根拠になっています。※飽和雨量＝土壌が雨水で飽和状態になるまでの雨量 一次流出率＝飽和雨量に達するまでの流出する割合

一方、森林水文学の学者、専門家からは「飽和雨量に達した後も 100%の流出はあり得ない。せいぜい 70%位の流出に留まるはず」との意見が出されてきました。しかし、国交省は「日本の森林土壌は未成熟だから保水力は極めて限られたものだ」として、これらの意見を頑として撥ね退けてきました。この頑迷な基準が遂に突き崩されました。皮肉にも国交省が身内と頼む？東大の研究所によって。

愛知県瀬戸市北部の森林に囲まれた丘陵地に、東京大学演習林・生態水文学研究所があります。同研究所は 1922(大正 11)年に愛知県から譲り受けたもので、当時は焼き物に使う燃料として森林は乱伐され、周囲は禿山だったといわれます。以来植林を続け、いまでは森林に覆われ土壌も回復しています。

森林の体積を示す「森林備蓄量」は、1935 年 1ヘクタール当たり 14 m³。2010 年 118 m³と 8 倍超に増大。降雨量と降った雨が川に流れ出す直接流出量の解析では「荒廃期 1935～1946」「回復期 2000～2010」で比較。1 時間当たりのピーク雨量が 30mm をこえる強い雨の場合、総雨量が 200mm で回復期の直接流出量は荒廃期に比べ 38.3%減り、400mm でも 25.6%も減少。保水力の差では、400mm で 71.3mm もありました。

極めてザックリとした計算ですが、上記をカスリーン台風の想定洪水流量 21100 トンに当てはめると、国交省は当時の禿山を基準に森林の保水力をみていますから、3 日間雨量 319 mm の直接流出量が 30%減少するとして 14770 トンに留まります。いかにザックリとはいえ、前頁の議事録に見る 15000 トンと見事に符合します。

同研究所の蔵治光一郎准教授は「大雨では森林の保水力は効果を発揮しないという国交省の従来の見解を覆す結果が出た。今後は森林政策と治水計画を融合してゆくことが望ましい」と語りました。

なお、群馬県の森林蓄積量は 1951 年の 1350 万 m³から 2007 年は 8490 万 m³と 6 倍以上に増加しています(林野庁調べ)。 ※以上は東京新聞特報部を参考にしました。

ハッ場ダム茨城控訴審進行協議

日時:2月13日(水)午後3時30分 場所:東京高等裁判所民事10部(南館16階)

※待合わせ:東京高裁1階ロビー。3時15分までお待ちします。

ハッ場ダムをストップさせる茨城の会 代表:濱田篤信 船津寛 柏村忠志

事務局：神原禮二 〒302-0023 取手市白山 1-8-5 携帯：090-4527-7768